

## 会長年頭挨拶 梅澤英行 会長 / 年男の弁(1)



## 会長年頭挨拶 梅澤英行 会長

親睦と親睦活動の違いについて普通の人にも言っても、何の事か分からないでしょう。逆に「この人、大丈夫？」と言われてしまうかもしれません。一般的にはこの二つは同じことを言っていると思われ、理解されていると思います。

しかしロータリーではこの二つの違いと、その意味するところについて多くのロータリアンが持論を展開し、その主張を述べているのです。その違いについて理解するには英語の“friendship”と“fellowship”の違いを例に挙げるのが近道かも知れません。

仲の良い友達と飲みに行く、マージャンをする、ゴルフをするといった事は“friendship”これは「親しみ合って仲よくすること、友情、親睦」という意味、一方“fellowship”は、「志を同じくする仲間、仲間意識、連帯感」という意味で使われているのです。これは、チームや組織、団体など、目的や理念が同じ者同士の間柄で使われることなのですが、ロータリーでは、前者の“fellowship”を「親睦」と訳してしまったのです。これが、誤解を生じる原因となってしまったのです。「友愛」と訳せば良かったという人もいます。

つまりロータリーの「親睦」とは、知り合い程度の交友ではなく、親しい者同士の友情でもなく、志を同じくする者同士の仲間意識であるということです。フェロウシップの精神を元にフレンドシップを行うという関係にあると考えられますから、フェロウシップはフレンドシップを可能にする精神のことで、より上位の概念だと言えます。つまり、ロータリーの親睦は一般社会の親睦より上位の概念だと言えます。

1923-1924年度のRI会長 Guy Gundaker は、“ロータリーの親睦”とは「ロータリーという苗木が

成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌である」と述べています。すなわち、ロータリーの成長を目的とした仲間同士の連帯の場(苗木に栄養を与える肥えた土壌)こそ、“ロータリーの親睦(fellowship)”であると述べているのです。苗木は、土壌が悪ければ十分に育ちませんが、土壌が良ければ立派に成長します。

すなわち、“ロータリーの親睦”は「ロータリーの成長・発展」が目的だということです。

## 年男の弁 酒井 純 会員

私は、1997年3月入会です。道南の渡島大野生まれ、木古内町、知内町、森町、瀬棚町、長万部町、と中学卒業まで転校をして、高校は函館でした。

高校時代には、再び渡島大野に住んでいました。木古内駅、新函館北斗駅(渡島大野)と私の父が勤務していた2つの駅に、新幹線の駅が出来たことを、とてもうれしく思っています。

今年度は、職業奉仕委員長を担当していますので、私の職歴についてお話しさせていただきます。まず就職です。京都の大学を卒業しましたが、東京には行きたくないという思いが強く、東海地方の複数の会社を志望し、最終的にピアノやその他の楽器を製造しているY社に入社。当時は、若者の音楽コンクール「ポプコン」や「世界歌謡祭」を主宰していて、非常に明るいイメージを感じて入社しました。

入社3年目に父が亡くなり、何とか北海道へ戻ろうと、公務員試験と公認会計士の2次試験を受験し、結果的に、公認会計士の道へ進み、札幌の公認会計士事務所に就職しました。試験に受かって、まだ「会計士補」という資格で3年間の修行が義務付けられていて、修行を終え3年後の最終試験に合格し、やっと「公認会計士」になりました。かなり、わがままな選択でしたが、すぐに、独立開業をさせてもらいました、29歳の時です。併せて税理士としても開業しました。何も当てがない状況での開業でしたが、先輩の仕事の手伝いをしたり、顧問先を紹介してもらったりしながら、少し

## ■本日のロータリーソング

## いざ友よ

2025-2026年度  
国際ロータリー会長のメッセージ

国際ロータリー会長:フランチェスコ・アレツツォ

よいことの  
ために  
手を取りあおう



ずつ顧問先が増えて、今の事務所の規模になりました。今は、パートも含めて職員6名です。

仕事の内容は、公認会計士としての監査業務、税理士としての税務業務が中心ですが、その他企業再生案件、地方自治体の包括外部監査、上場会社の監査役など、いろいろと経験してきております。最近、年齢や体力のこともありますので、公認会計士・税理士の本来の業務以外は、できるだけ少なくするように心がけていますが、毎月木曜日に、取締役会がある会社もあり、当クラブに十分に貢献できていないのが実情です。

最後になりますが、1月29日の例会では、2510地区職業奉仕委員長である大坪誠治様の卓話を企画しましたので、会員の皆様におかれましては、出席のご協力をお願い申し上げます。

## 年男の弁 喜多伸行 会員

皆さま、本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。本日は「年男の弁」をテーマに、札幌東ロータリークラブが大切にしてきた歴史と伝統、そして私自身のロータリークラブにての経験を通して感じたことをお話しさせていただきます。

私は平成28年2月18日に入会いたしました。推薦者はサッポロ珈琲館の当時社長でありました伊藤栄一様に『とても良い方が集まる会があり是非入会した方が良い？ しない？』と助言をいただきましたが、その当時の私と伊藤さんとの間には、答えが『ハイかイエス』しかなく、入会させて頂きました。

入会当初の私は、現場責任者、チームリーダー、経営者の仕事の絶頂期の為、例会参加はいつも開始時間ギリギリでした。「とにかく出席すること」が精一杯で、歴史や伝統を深く意識する余裕は正直なところありませんでした。

そんな私が変わるきっかけとなったのが、入会4年目、2018-2019年度に拝命した副SAAです。SAAは、例会の秩序と品格を守る役職であり、ロータリーの伝統を体現する存在です。ですがなかなか1時間前には来られません。その時の上田SAAが『来られる時

間でいいよ』と言うありがたい言葉を私に言って下さったのがきっかけで、例会の1時間前には会場に入るということを、自分に課しました。

木曜日に限り仕事の段取りを見直し、一日の流れを組み立て直す。簡単ではありませんでしたが、その習慣が今の自分につながっていると強く感じています。早く来て準備をする。会員同士で自然に声を掛け合う。例会は始まる前からすでに始まっている。この経験を通じて、『約束を守り、責任を重んずる』という言葉の意味を、行動として理解できるようになりました。

そしてその後、私は社会奉仕委員長(2022-2023年度)を務めることとなります。社会奉仕は、ロータリーの歴史と伝統の中でも、特に「行動」が問われる分野です。その中で私の心に強く残っているのが、ろう者とのフットサル交流会、そしてユニバーサルカーリング大会です。言葉が通じないからこそ、最初は戸惑いもありました。しかし、一緒に体を動かし、同じルールの中で笑い、喜ぶことで言葉以上に通じ合えるものがあることを実感しました。ユニバーサルカーリング大会では、年齢や障がいの有無に関係なく、誰もが同じフィールドで楽しめる。そこには「助ける側」「助けられる側」という区別はなく、共に参加し、共に楽しむ奉仕がありました。この時、私は改めてロータリーの奉仕とは、特別なことをするのではなく、相手の立場に立ち、共に時間を過ごすことなのだと感じました。これはまさに、『礼節を尊び、感謝を忘れない』『社会に奉仕する』という言葉そのものだと思います。

副SAAで学んだ時間を守ること、準備をすること、責任を果たすこと。その土台があったからこそ、社会奉仕委員長としての活動も、形だけではなく、心の通った奉仕として取り組むことができたのだと感じています。

その翌年には、ロータリークラブ五大奉仕の一つである青少年奉仕委員長を拝命いたしました。北海道高等学校インターアクトクラブへの支援を軸に、各種奉仕活動に取り組んでまいりました。生徒との関わりが多く、自身の子どもより年下の世代と接する機会を得られたことは、非常に新鮮で貴重な経験となりました。また、社会奉仕活動への支援や障害者施設への訪問支援など、インターアクトクラブの生徒と共に奉仕活動を行えたことは、大変喜ばしいことでありました。その翌年が出席委員長、そして今年度はクラブ会報委員長としてロータリーを学びさせて頂いております。言葉として残っているだけではありません。役職を通じ、行動を通じて、次の世代へと受け継いでいくものとロータリーで学びました。

私自身、まだ道半ばではありますが、これまでの経験を糧に、声だけでなく行動で示せるロータリアンであり続けたいと思っています。

本日はありがとうございました。